



## 自然を語る会 報告

『レイチェル・カーソン』(ポール・ブルックス著) 第18章 終わりそして始まり

2018年3月17日(土) 10:00~12:00 於: 日比谷図書文化館

参加者 12名

担当 井上正太さん

レイチェル・カーソンが1959年に書き始めた『沈黙の春』は4年後、1962年に完成した。書き始めた当初は1960年初めには終わるという楽観的な見通しであったが、膨大な資料を得て内容がどんどん広がっていったことに加え、レイチェルや養子のロジャーの健康状態が大きく執筆の足を引っ張ったのだ。しかし、そのような状況の中でも、農薬散布計画に対する講演や民主党顧問会議の天然資源委員会などの社会的な活動も行っていた。

1960年9月に鳥の章が完成した時、ブルックスの提案で「沈黙の春」というタイトルが浮上し、キーツの詩が引用されて、決定となった。

1962年1月、彼女は最後の章に取り掛かっていたが、それ以外の章を編集者たちに送った。それに対してニューヨークの編集者のショーン氏から良い反応を得て、深い安堵を覚えたレイチェルだった。

『沈黙の春』の執筆中のレイチェルの様子や回想を記した18章を井上氏はわかりやすくまとめ、かつ本文中に出てくる鳥なども紹介して話されたので、臨場感あふれる読書会となった。

章のタイトル「終わりそして始まり」という言葉の意味について質問があった。長く大変だった執筆が終わった、そしてその後の社会的影響がこれから始まる、ということではないかと話しあった。

文責: 小川